

【全国唯研の先達に聞く】

吉田千秋氏インタビュー

2018年4月9日 於・岐阜市内

インタビュアー：竹内章郎

はじめに

予め用意したレジュメに、大雑把な質問項目を四点記しておき、それらに即して吉田千秋さんに話していただいた。この四つの項目を其々の話の冒頭に掲げる。

1 「全国唯研」の創設に関して

- (1) 若手ゼミなどとの関係
- (2) その際の、過去の唯研系組織に関して：例えば、戦前の唯研や日本唯研の分裂等々
- (3) 吉田さん世代と、先輩研究者及び団塊の世代研究者との関係

T(竹内): 「全国唯研」の創設に関わり、今のうちにまとまった話を聞いておきたいと思い、インタビューさせてもらいます。およそ4点くらいに関わっていますが、まずは唯研創設の頃の若手ゼミや大学紛争後の研究者のありようなどからお願いします。

Y(吉田): 資料も持ってきたのだけど、思いつくままに、ということで、いいですね。一応は、レジュメに添って話したいと思います。

「全国唯研」を考えると、一番最初の質問にあるように、若手哲学ゼミナールとの関係を話さなければいけないと思います。逆に言うと、若手ゼミを作ったから、唯物論研究者が全国的に共同して発展を目指すなければならない、という機運が我々の間に出てきたんです。

若手哲学ゼミナールというのは、『哲学の探究』という機関誌を作っていますが、創設のきっかけは、故石井伸男さんと私とで、『科学と思想』(新日本出版社)に、「日本哲学学会の動向と哲学研究のあり方」という共同レポートを執筆して、その中で日本の現実

の政治社会思想問題に日本哲学学会が十分に切り込んでいないのではないか、だから、そういう日本の現実の政治・社会・人間の根本的な問題について切り込むような方向の哲学が必要だ、ということ、若造二人で偉そうに言った訳です。

T: 吉田さんは30前?

Y: 1971年のだから、26才、博士課程の時。当時、山科三郎さんが『科学と思想』の編集長で、私を石井さんに引き合わせてくれて書かないか、と誘ってくれたんです。石井さんと会って、今言った趣旨で意気投合して書いたのです。

その後、山科さんの下で編集実務を行なっておられた大枝秀一さんを交えて、次のような話し合いして、「若手ゼミナール」創設にむけて歩みました。

いま全国的に若手の研究者が非常に苦境に陥っていると同時に、バラバラになっている。特に民主的な考えを持ってそれなりにがんばっている人たちは、そうなっている。状況は詳しくは分からないけれど、聞いていると、当時唯物論の立場に立った先生がいた大学はそんなに多くなく、院生をそれなりに抱えていたのは、名古屋大と都立大と北海道大と一橋大の4つだけだったんです。ところが、その4つの大学の若手研究者も、将来的なイメージも立たないし、就職口の世話もしてもらえないのか分からない。それはもうわれわれだけではなかったし、他の大学でもそうだった。それで、個別的に聞くと東大でも唯物論の立場を目指す人も、京都大にもいる(僕の出身だけれど)。あちこちでそういう話を聞く。けれども、教師達がいらない。だから僕は名古屋大へ行った訳だけれど。そこで将来的な見通しがあるかという、ない。ましてや指導教師がいなかった場合は、そういうのを持てる環境がないし、知り合いもほとんどいない。

そういう状況があったから、これはやっぱり、きちんと呼びかける必要があるということになった。どのくらいの要望があるか分からないが、石井さんと話して、呼びかけ人を各地から求めようという考え方でまとまったんです。僕は名古屋、石井さんは東京、北海道の村山紀昭さん、京都の向井俊彦さん、親友の吉田傑俊は鹿児島、という具合で・・・これで全国的な配置になる。この5人で呼びかけようとなった。呼びかけるときに、大枝さんがかなり探してくれて、参加者の組織のための名簿も作成できました。

それで、若手ゼミの第1回目は湯河原で、1973年7月に開催できました。「全国唯研」ができる5年前のことなんです。なんと、手弁当で若手ばかりが63名も集まった。参加資格は「大学学部卒業年齢から30才前半」としましたが、40近くの人もありました。僕の記憶では一番の年寄りが、中村行秀さん、瀬戸明さんの二人です。世話人で就職していたのは、村山さんが北教大講師、傑俊さんは鹿児島大講師で、石井さんは都立大大学院、向井さんが京都大大学院、僕が愛知大学非常勤講師、といった具合で、ほとんどが未就職でした。

ともかく、63名集まり、びっくりしました。開催要項では「規模40名前後」としていました。皆さんが社会的現実的な問題を哲学的に探求し、しかもバラバラではなくて、お互い知り合ってやっついこうしていることを強く感じました。

大会前に、呼びかけの世話人5人で原則みたいなものを話し合いました。第1には、現実の諸問題を哲学的に探求する、ということを中心的な視点にして、哲学的な知見も含めて活用して説明する。次に、組織論的には、民主主義を徹底するということを重視しました。民主主義というのは原理的には上下関係が無いことで、お互いが共同して力を合わせて展開しようとしたのです。その具体化として、偉い先生を呼んで講演してもらい、その話を聞いてシャンシャンという風にはしない。それから、呼びかけた世話人5名は2年限りで辞める、つまりボスはつぐらない、という原則も決めました。3つめは、毎年、次年に開催するかどうかその都度話し合うことに

しました。4つめに、東京だけではなく各地方の独自性・地域性を生かす形で委員を選定したり、あるいは報告・シンポジウムの偏りはないようにしました。民主主義的な原則を元にした、民主主義のセンスあふれる清新な共同研究の場にしよう、と。

これは、その後さらに発展・展開していったように思われます。僕らが去った後ですが、いわゆる社会派というか唯物論派ではない人たちも参加され、運営にも携わるようになりました。それ自体が新たな発展の形態だと思いました。それは、どういう哲学的立場であろうが、どこの大学院でも将来の安定性がなく、院生が孤立している状況を示しているからです。指導教師のさじ加減ひとつで、非常勤講師のポストを与えられて何とかODでもやっていくとか、あるいは、どこそこの就職ポストを探してもらったとか、要は教師に頭が上がらない構造になっているから、そういう所から抜けて自分なりに自由にやれるような方向を求めていたと解釈できると思います。

「全国唯研」創設の前段には、そういう若手ゼミの動きと進展があったのですが、当時の唯物論研究全体ということでは、日本の唯物論研究者達は雑誌『唯物論』、『唯物論研究』といった雑誌中心に個々人が集まっていました。組織的には、かつての「唯物論研究会」のような全国組織はなく、北海道は札幌唯研、東京は東京唯研、名古屋は名古屋哲学研究会、大阪は日本科学者会議大阪支部のが関西唯物論研究会、という具合で個別的に活動していました。それらの研究会には、もちろんそれなりの経緯があり、それぞれ独自の性格と気風を持っていました。もちろんこれらに属さない人たちもいました。そういう人たちが『唯物論』『唯物論研究』に協力してそれなりに唯物論研究者群として成り立っていたのです。

でも、若手から見たら、きら星のような人は、それぞれが一人一城主というか、バラバラに何人かいるようにしか見えなかったんです。秋間実さん、岩崎允胤さん、真下信一さん、藤野渉さん、島田豊さん、芝田進午さん、鯉坂真さんといった方々がいたんですが、協力して何とか発展させようとするのが見えなかったんです。そこに、僕ら若手の不満があった

わけで、「唯物論研究会」の戦前のイメージがあるし、やはり現代社会で、何らかの形で、今ほどではないにせよ、70年・80年代の反動化の中で対抗できる思想的・哲学的な戦線を共同で張らなければならない、という機運を作って欲しい・作りたいというのが自主的に出てきた、と言えると思います。こういう声、気運が大きく増して、いまあげた上の方の人達も、それはそうだねという話になって、唯物論研究協会というものを作ることになった、というように理解しています。

T: その時、吉田さん・石田さん世代が上に働きかけたという方が強いのでしょうか？ それとも、上の世代から何とかしろって言われた方が強いのですか？

Y: 実は、上の方から自主的に力を合わせましようと言うことは聞いたことがありません。例えば、「全国唯研」の歴代委員長は初代から順に、湯川和夫、岩崎允胤、島田豊、秋間実、芝田進午、古田光の各氏で、この後の委員長は全部若手ゼミの出身者達です。それまでのこの顔ぶれだけ見れば、岩崎・島田・秋間・芝田・古田、この人たちが一緒に話し合ったということは聞いていません。各人が抱えている唯物論の認識・立場も違うし、それぞれ一人ひとりが、日本の唯物論と進歩的な社会運動を担って精一杯やっておられたように思います。逆に言えばそれで精一杯で、各自バラバラにやっているものを一つにまとめる労苦を取れなかったように思われます。同時に、そのことは、日本の現実の思想的課題に対して非唯物論の立場に立ち人も含めてどう立ち向かうのか、さらにその主体者として若い人たちをどう育てていくかという観点も、希薄だったのではないかと思われまます。部分的には、芝田さんのような試みはありましたが。

T: 芝田私塾ですよね。マルクス主義研究セミナーでしたっけ？

Y: そうです。当時、島田豊さんが編集した『史的唯物論』第1巻の「自由論」は僕が書いたのですが、それについて話してほしいと言われて行ったのを覚えています。その時の印象では、そのセミナーは芝田理論集団を作るためのもののような感じでした。

この例だけでは語れませんが、これらの人達が共

同して作りましたというよりは、下からの突き上げでもって「全国唯研」はできたと思っています。皆さんの話を聞いても、中村さんとか石井さんとか、それから、後藤道夫さんとか佐藤和夫さんとかが、その都度秋間さんとかをかなり突っついてのは事実だと思います。僕も名古屋で島田さんなりにプッシュしました。

T: その時、吉田さん・傑俊さん世代と、後藤さんや佐藤さん達の団塊の世代とは、若手ゼミの時からほぼ一体だったんですか？

Y: 一体だったですね。

T: 世話人は、団塊世代よりももうちょっと上だけ。実際やったことは一体だったということですか？

Y: そうですね。どういうことかは、若手ゼミの報告集『哲学の探求』創刊号を一見するだけで明らかです。そこには、個別の研究発表者として岩瀬充自、高田純、鈴木富久の各氏の名前があるし、後藤さんもシンポジウム一つのまとめ役(文責者)としてなっています。つまり、最初の段階から、その後中心になっていった団塊の世代の人達が既に中心的な役割を担って参加しているのです。

唯物論研究協会が最初に発行したのは『唯物論研究』ですが、その後論争などあって『思想と現代』になった訳ですが、『唯物論研究』創刊号を改めて見てみると、傑俊さん、石井さんのほか、佐藤和夫、亀山純生、赤井正二、種村完司、牧野、古茂田宏と、なんと8人が若手の書き手なのです。

T: つまり、若手ゼミを担っている世代が半数を占めているということですね。

Y: そうです。實際上、理論的な中核として登場しているのです。若手ゼミを創った世代が委員長として登場するのは1992年の中村さんからだから、創設14年後です。だが、実際上の理論的な活動をやるのは若手ゼミ出身の人達が初手から中核を担っていたと言ってもいいのではないのでしょうか。逆に言うと、上の世代が退いたわけではないのだけど、若手のそれなりの意気込みというか、時代の最先端に行く新鮮な力、これが「全国唯研」を支えて発展させてきたということです。そういう連関で若手ゼミを捉えると、若手ゼミの誕生とその展開は、非常に大きな役

割を果たしたということが、客観的に見ても成り立つのではないかと考えています。

1-(3)については、その中で、上の世代との関係で言っても、われわれはそれなりに恩師という人を持っている人と、そうでない人とに別れていた。僕はいわゆる恩師というべき人を持っていた一人だが、恩師となる人と対立的にならざるをえなかった一橋大のグループもあったし、都立大の石井さんと秋間さんとの関係にしても恩師どうこうという関係でもなかったようです。どちらにしろ、若手ゼミの出身者は、アカデミーの世界によくある「献身的な」師弟関係みたいものを大事にして振る舞った人をあまり知らない。そのことは、幸か不幸か旧帝大とか大大学で教授ポストを占めてる人が少なかったということも幸いしてるかもしれない。就職をさせられるかどうかというのは大きな権力だから、そういうことはあまりできなかったということも幸いしてるかもしれない。でも、根本的には、若手ゼミ出身の皆さんには民主主義の精神が培われているから、旧い師弟関係は取りえなかったのだと思います。

2 創設からしばらくの「全国唯研」の運営等に関して

- (1) 日本哲学会その他のアカデミーとの関係に関して
- (2) 政治と哲学、また唯物論と政治性との関係等々に関して
- (3) 「全国唯研」内部における「論争」・「立場」に関して

Y: 日本哲学会などとの関係に入ります。「全国唯研」がともかくできて、若手の出身者も委員に何人かなって、支えてきた。12年目にして委員長がそこから登場するということにもなった訳です。旧アカデミーとの関係で言うと、それなりに著名な人や、日哲の委員になった人が「全国唯研」の委員にもなってきますが、若手が中心になってからは逆に、「全国唯研」の中から積極的に日哲の委員に推しだして、そこでの影響力や共同ができないかという模索が意識的に行われた。これは、これまでにはなかったこ

とだと思います。かって唯物論研究者はある種のエリート意識を持っていて、日哲といったアカデミーからハバにされても仕方ないという意識もあったのではないかと思います。少なくとも、僕らの間だってそういうのはあるけど、共同できるところは共同しようという風にやって来たと思う。ただ、力足らずで、300人足らずの会で、いろんな分野の人が入ってるし、例えばカント学会とかの個別対象の会とも違うし、アカデミーの学会との共同というのはあまり上手にできなかったと思いますが、そういう努力は今後ももっとしていいと思う。

T: ところが、「全国唯研」の中の若手は哲学がガタ減りで、他の分野の方が優勢になってきていますので、「全国唯研」は哲学中心という風ではなくなってきています

Y: 残念ですが、そうすると唯物論も何もなくなってくるような気がします。看板になっている「唯物論」について、一番基軸になるべき会員がいないことになると訳ですから。

その「唯物論」ということですが、それをどのように捉えるかということについて、根本的な立場・視点の相違があったのは事実です。一方に唯物論を認識論中心の客観主義的な形で受け止めてきた立場を固守する立場があって、日本の前衛政党的な基本的な立場として受容されるということもあって、理論性と政治性とは連なっているとします。他方それではいけないという視点もあって、そこからいわゆる実践的唯物論ということが積極的に主張されてきました。この主張は、戦後の流れで言うと、客観的唯物論とか主体的唯物論を再編成する形で、現実的社会的諸問題に対する哲学的・思想的な解決の方向を与えるものでした。それを島田さんや芝田さんが、実践的唯物論という形で表現してから広く浸透し、客観的・認識論的な立場を取る人達は少数派になってきた。そのことと合わせて、政治性ということと一定の距離感が保たれつつ、それもそれなりのいい意味での多数のバランスというものもあって、「全国唯研」の内部は分裂しなかった。

いわゆる認識論的・客観的な唯物論の人達も、實際上、実践的な諸課題に立ち向かわねばならな

いので、実践的唯物論もある程度は了解できることだから、ということであからさまに反対するということはなかったように思う。確かに理論上の一定の相違はあったことは事実だし、論争的な形でも展開されたが、全体としては実践主義的な唯物論の方向に多数が推移して、実践的に社会的な問題を課題として捉えていったと思う。

だがその後、多様な見解・視点を認める立場で、相互批判をあんまりしないような状況を生み出されてきたのではないかと思う。僕もその中に入るのかもしれないが、思想・文化が大事だという人もいたし、やはりもっと原理的に哲学としての追究をやる必要があるのではないかという批判もあった。さらに、若手の方では主流になっていったと思われるが、現実的な諸問題を哲学的・思想的に解決しようとする、必然的に社会哲学的な領域を主領域とする人が登場することになったように思う。こうして社会哲学中心の考え方・理論的な探究が「全国唯研」の柱ともいえる流れになっていったと思われまます。それに対して、もう少し原理的な議論をという声も当然あったと思いますが、それをどういう風にやっていくかどうかについては、今後の課題だと思います。

T:僕の世代からみると、団塊の世代が、「全国唯研」ができた頃から団結してずっと行くのかと思っていたら、今吉田さんが言われたような傾向があったせいもあって、団塊の世代のいわば「分解」というようなことも気になります、さっきの一人ひとりの孤立じゃないけど、せっかく若手ゼミから結集する中核を担った集団が、もう現時点では本当にバラバラみたいになってきて、ほとんど団塊の世代がまとまって話をする機会すらないようにも見えます。

いま吉田さんが言われたような傾向があったこともあって、「全国唯研」を担ってきた団塊世代の人が中心になって、「全国唯研」の社会哲学中心に対して、いくつかの学会を離れて作っていったでしょ。せっかく「全国唯研」で、それなりのいい意味での集団性を発揮できる場を作ったのに、今はもうそうじゃない。そのへんの問題が、僕の下世代では、さらにあまり理解されていないように思いますが…。

Y:まとまる方がいいことかどうかっていう根本問題

はあるけどね。

T:論争・批判をすればいいけど、話もしないような感じになっているように思う。たぶん、「全国唯研」の創設を担った団塊世代の有力な人たちの中の多くは、理論的な次元でのコミュニケーションを10年、いや15年以上もしてないのではないですか。

Y:それぞれの立場は違うんだけど、違うからそれを容認しているというか、エールを送ればいいのに、エールも送らないままできてる、ということは確かにあるようですね。僕は東京から離れてるから個別のことは分からないけど…。ともかく、論争とか立場とかに関しては、まだ十分に言いたりないというか消化できてないけど、感想的に言うと、そういう風で、誰かが媒介してまとめればいいのかは思っていないわけで、それぞれの品格に基づいてそれぞれのやり方をするしかない、と思っています。

T:それでも、若手ゼミ作ったときには、それぞれというよりも何とかまとまってという雰囲気があったわけじゃないですか、その雰囲気の良さが何かもう消えかかっているように思うんです。別にこれをガチツとしたリジットな集団ということを言ってるんじゃないけど、たぶん若手ゼミを作った頃のいい意味での共同性とかそういうものがだんだんなくなっているというか…。僕でも感じるから、吉田さんの世代からしたら僕らの方が個人主義化している時代だけど、それでもさらにホントの意味での、いい意味での集団を作るという感覚が必要だと思うんですが…。

Y:その話を聞くと、ちょっとした印象だけど、「全国唯研」を作る前の偉い人達がそれなりに自分の仕事を個人として貢献してやってるという、そういう状況・雰囲気にちょっと近いね。そうすると、そういうことを何とかするというのは、若い力にしかない。

T:でしょ。もう僕らの還暦を迎えた世代は無理ですね。

Y:そういう点で言うと、最近久しぶりに参加したREM (Radical Equality Members)研究会で思ったのは、あの範囲内だけれども、後藤、中西さんが偉いなど思ったのは、あんまり余分なことは喋らず、中心になってる鈴木さんとかにまかせ、若い高山さんたちに自由に意見を言ってもらってるなど、いう印象をもちま

した。

T:あれが、若手ゼミとか「全国唯研」を作ったときとかのような全国的なものにはなかなかならない、という問題がありますね。

Y:それはなあって欲しいんだけど。ただ芽生えはあるなと思った。

T:そう。それは僕も前から思っていました。だから、もう60才以上は手を引くべきかもしれない、とも思います。

Y:手を引くのがいいのかどうかは別にして。

T:たぶん、新しい感覚の良さに期待するしかない。

Y:そうね。若い高山君とか二宮君とかは言いたい放題言うね。個人的キャラクターはあるかもしれないけど、今までの既成の組織とかに関係なしに言うでしょ。アレでいいんじゃないかな。

T:僕はああいう風に任せるしかないと思ってるけど、正直言うとあれでいいのかなとも思ってる。内容的に、だけど、変な口出しはしない方がいいなとは思ってる。

Y:だから、権威主義的に聞こえるような感じではないような形で、いわば議論する場としてきちんと上の者が発言してやっていけるような、そういうスタイルを作り出せばいいなと思う。

T:そのへんも、団塊の世代というか、大学民主化闘争にそれなりにコミットした世代の人は、僕らが若手に何かを言うよりも上手いというか、権威主義的でなく若い世代に上手く言っている。

Y:それは若世代の人がそれなりに尊敬しているからかな。

T:それは、理論的な力も大きいけれど、何か、あの紛争の時代の経験が大きいような気がする。直観だけど。単に理論的にできたということだけじゃないような気がする。理論的に大きな貢献ができたのもあの経験が大きいんじゃないかと思う。

3 後輩研究者の育成などに関して

4 若い世代への「伝えておきたいこと」: 現下の情勢等々と関わって

Y:後輩・若手の育成どうするかは、僕はあんまり分からなくて…。

T:もうちょっとストレートに、こうしろああしろとかを遠慮せずに言ってもらいたいんですが…若いやつはなっとらんとか…。

Y:「全国唯研」内で、若手が来やすいようにやっている様々な施策の実現はすごいことだと思っただけで、若い世代にとって。というのも、いま大学の中がものすごく困難な状況に陥ってることがあると推測するからです。

T:困難どころじゃない、酷い状態ですが。

Y:だが、それに対して、大学院生などの若い研究者がどういう風に思ってるか自体が僕らには分からない。大学を去ってから何年にもなるし…。大学の状況も分からない。何の情報も伝わらないから。部分的に分かることもあるが、なかば公に外へ知らされてるものでしかありません。

例えば、大学の軍事研究問題ですが、そういう問題に関して、僕が主宰している「哲学カフェdeぎふ」の9周年行事で池内了先生を呼んで講演してもらって、140名ほどの市民が来た。けれども、大学の人が来なかった。要は、大学の内情が分からない。若い研究者がどういう状況に置かれてるのか、軍事研究についてどう思っているのか。そういうことに対して、いろんな人たちと共同して、大学の自由な研究云々ということからすればおかしいんじゃないかという声を上げて欲しいですね。

何よりも、大学が今苦境に陥っているということを外に知らせる活動をもっと欲しいと思う。まったくと言っていいほどそれが伝わってこない。自分たちが困ってますよ、何とかして下さいと言っても時既に遅しで、市民にとっては「大学はそんなことになってるの」、というだけの話になってしまいかねない。それまで大学の偉い先生が自分たちの所へ足運んでくれてがんばって教えてくれ助けてくれたとか、大学の外へ出て教育していた。昔で言ったら公害問題とかで大学の外へ出て、分野を超えて活動していた。

最近では、大学の人間は外の人間とどうやって共同するのか、ということについて余りにも無策のままに推移してきたように思う。これをどうするのか。実際には大学で大変なことが起こっていても誰も助け

てくれない、という状況じゃないですかね。ここに悲劇が起こる。若い人達には、今の文科省の教育に対する介入の問題がかなりあったりして分かると思うから、シンポジウムとか討論会とかを学内で主催するとかあればいいですね。そうすれば若い人達はそれなりにいろんなことを思っていることが分かると思う。ただ最近では、そういうことに対して発言するとか意見を表明するとかはほぼゼロですね。

僕が期待するのは、若い人達が、できる限り社会との繋がりをどうやって持っていくのか、ということですね。今は若い人達だけではなくて、その上の人達でも、あまりにもそうしたことがないから心配です。いざとなったら誰も助けてくれないかもしれません。下手をすると大学の人間に対して弓矢を放つかもれません。

T:最後の、大学と社会との関係。例えば、改組の事態や大学紛争といった経験が若い世代には、きちんとは伝わってない、という問題も大きいように思いますが、そろそろ時間になりましたので、こらで終りにしたいと思います。

吉田千秋さん、長時間、ありがとうございました。